
S.M.W

goukakaizinn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S・M・W

【Nコード】

N30810

【作者名】

goukakaizinn

【あらすじ】

科学と魔法がどちらも発展した世界。人の中には、魔法に向いている者と、科学に向いている者の別れていた。高校生である三崎順平は、幼い時に両親が離婚。それからは母親を失い、親の知り合いに引き取られて暮らしている。将来科学者になるために勉強に力を入れて過ごす毎日で、魔法などには全くの才能はないはずが、ある日自身の特殊な力に覚醒する。その力を手に入れて以来、いろんな人達と触れ合い、さまざまな事件に巻き込まれていく。

登場人物

・三崎順平（主人公）

性別 男

身長 173 cm

年齢 16歳（高校一年生）

幼い時は両親が離婚して、離婚する前は裕福な家庭だった。

離婚後は、母親と暮らすものの母親が病気で他界。

以後は、母親の知り合いに引き取ってもらっている。

学校は科学コースと魔法コースに分かれる高校に通っている。

学科は科学で、魔法の才能はほぼない。

・立川 春奈

性別 女

身長 159 cm

年齢 16歳（高校一年生）

主人公・三崎順平の小学校からの幼馴染。

順平とは違い、魔法の才能に恵まれて、小学校から魔法を使い始めている。

学校は順平と同じ学校だが、学校は魔法コースに通っている。

順平がピンチの時には、助け役。

周りが魔法をろくに使えない科学コースの人達を馬鹿にしているのに対し、立川は順平や科学コースの人達にも普通どおり接する女の子。

・草加雄一

性別 男

身長 176 cm

年齢 16 歳（高校一年生）

主人公・三崎順平の中学校からの親友。

学校も同だが、立川 春奈と一緒に同じ魔法コースに通う。

家は、魔法のエリート一家である。

家のせいか、親には、魔法が全く使えない順平との関係をふせている。

・青髪 勇太郎

性別 男

身長 169 cm

年齢 16 歳（高校一年生）

学校では科学コースに通い、科学の成績は優秀。

主人公・三崎順平とは高校で初めて知り合い、クラスが一緒に仲良くなる。

実は魔法も科学もどちらも優秀だったが、おもしろそうという理由で科学を選んだ。

登場人物（後書き）

キャラはこれからたくさん出ますが、紹介するのはとりあえずこれくらいにしておきます。

基本的に名前に意味はありません。

なんとなく頭に浮かんだ名前です（笑）

世界観

大昔、人々は魔族との戦争が絶えなかった。

人間は核兵器や生物兵器などを使った科学兵器での戦い。

対する魔族は、魔法と呼ばれる力で人間と戦った。

争いは両者続いたまま10年も続いた。

この世界の神は争いにより、汚れる大地を救うために、世界を大洪水にした。

世界からは、人間の声も薄れ、世界はほとんど緑だけとなった。

それから1000年も世界には空白があった。

かろじて生き残っていた少数の人間は、子孫を残し徐々に人口を増やした。

そしてその人類は、昔の人間や魔族が残したとされる科学・魔法を発見する。

人類は科学と魔法の両方を発展させ、魔法を科学で解き明かす魔科学を作り出す。

徐々に科学・魔法を発展させ、現在にまで至る。

世界観（後書き）

次はプロローグを出したいと思います。

ちなみに世界観は、神話に出てくる「ノアの箱舟」を参考にしました。

少し似てますね（笑）

プロローグ

俺の名前は三崎順平。

6歳ぐらいの時に両親が離婚してから、俺は母親と一緒に住んでいた。

けど、それから4年後の俺が10歳の時に、母親が病気で他界。

それ以来は、母親の知り合いで近所のおばさんとおじさんに引き取ってもらっている。

これまで通り、養育費も父親から送られている。

最初おばさんの家に行くことには流石に遠慮したが、おばさん達は暖かい目で、俺が家に来ることを歓迎してくれた。

まるで俺のことを本当の子供のように思ってくれている。

それと俺には魔法を使うことが全くできない。

けど父親は、魔法を使うことには天才だったらしい。

父親だけでなく、俺の一族は代々魔法を使う才能に関しては天才だったらしい。

軍や警察などの役所からも、多数スカウトがあることもしばしばだったらしく、俺の家柄を聞いただけで、そこら辺にいる人々でも驚

くほどだったらしい。

けど、そんな一族で生まれた俺だが、生まれた時から魔法の才能がなく落ちこぼれだった。

幼い時は親戚からも期待されていたが、周りが俺に才能がないことがわかったと、俺や母さんは周りから冷たい視線で見られた。

わからないし、聞いたこともないけど、両親が離婚した理由が俺のせいなんじゃないかとも思った。

けど俺の母さんは、俺がそんな話を持ち出しても「そんなことないよ。順のせいじゃないよ」と言って笑顔で笑ってくれた。

立派な家柄を元は持っていたのに、魔法に才能がないことで俺もひどく落ち込んでいた時期もあった。

けど、今の俺にはそんな思いを吹き飛ばしてくれる友達がいる。

そう俺には二人の親友がいる。

第一章

時刻は午前7時

チリリリリリリリン

7時にセットしていた目覚まし時計が鳴る。
寝ぼけながらも起き上がり、目覚まし時計の頭部をチョップしようとする。

けど鳴り止まない……

今度は、高く振り上げ目覚まし時計をチョップしようとする。

ドン！

「いて！」

何か硬い物に手をぶつけてしまった。
痛みをこらえるために、片方の手でぶつけてしまった手を必死でさする。

横をよく見てみると、目覚まし時計の頭部には当たってなく、机の角に手をぶつけてしまった。

今度はよく目覚まし時計を見て、チョップではなく頭部を軽く叩く。

ピッ！

「やっと鳴りやんだ・・・」

三崎順平は伸びをし、それを終わると、部屋のカーテンを全開にした。

日差しが部屋にさしこんでくる。

「今日も一日が始まるのか・・・」

ひとまず順平は階段から一階に下りる。

「おはよう」

階段を下りると、キッチンにはおばさんが朝ごはんの支度をしていた。

「おはよう。順君」

おばさんが笑顔で挨拶をしてくる。

朝食が出来そうなので、テーブルの椅子に座る。

すると扉が開くと、スーツ姿のおじさんが出てきた。

「おはよう！順君！」

「おはよう。おじさん」

おじさんもテーブルの椅子に座り、おばさんも朝食のおかずをテーブルに並べる。

全て並び終わると、おばさんも椅子に座った。

「いただきます！」

「順君！そろそろ行かなくていいの？」

気が付くとそろそろ学校に行く時間に迫ってきていた。

朝食がうますぎて、ずっと食べすぎていたことと、TVのNEWSを見ながら食べていたせいか知らない間に時間が過ぎていた。

「やべ！」

急いで、洗面所に行き、歯磨きや髪を整えたりなどの支度をすませる。

その後は、二階の自分の部屋に駆け込み、着替えを済ませる。

腕時計を見ると、時刻8時になっていた。

「もう出なきゃ！」

と部屋を出ようとしたとき・

「あ！」

ある忘れ物に気付いた。

机からある物を取る。

母親の形見である指輪である。

外に出るときはこれがなきゃ落ち着かなく、お守りにしている。

指輪は指にしないものの、それにチェーンを付けている。

それを首にかけ、急いで一階に下りた。

「おばさん！おじさん！行ってきましたーす」

「「行つてらっしゃーい」「」

玄関でくつをはき終え、学校へ向かう。

一日の朝はこんなもんである。

おじさん。おばさんと言っても、年齢は高校生の親の平均と変わらないぐらいである。

まるで自分のことを、本当の子供のように扱ってくれることに本当に感謝している。

いつも、こんな平凡で変わらない一日である。

しかし、今日だけはいつもととは違かった。

学校を目指して、歩いていると、黒い高級車の車が止まっていた。その車からスーツを着たビジネスマンのような男が出てきた。

変だとは思ったが、とりあえず気にせずまっすぐ歩いた。

「おはようございます。順平様」

その男は、順平が車をさしかかる所へんで、頭を下げて挨拶をしてきた。

そうこいつのことを順平は知っている。

たまにある。

前もこんな感じの男に、声をかけられたことがある。

そうこの人は、”あいつ”の部下である。

あの最低な”あいつ”の部下である。

「順平様。京平様から、これを預かってまいりました。」

すると男は、順平にある手紙を渡してきた。

「また後で、お伺いします。それでは、失礼します」

男は、頭を下げると、車に乗り、どこかへ行ってしまった。

手紙の送り主を見ると、やはり”あいつ”だった。

「あいつ・・・今頃何の用だ。俺と母さんを見捨てておいて・・・」

順平は手紙をカバンの中に入れた。

第一章（後書き）

やはり文が变かも・・・

变だと思ったら気にせず言ってください！

第二章（前書き）

バイトが忙しいせい、更新できませんでした。
すいません。

第二章

「はあ」

順平は朝から気分がとても悪かった。

”あいつ”とは、関わりを持ちたくなかったのはずなのだが、手紙を渡されてしまった。

手紙はまだ読んでいないが、多分、今日”あいつ”に家に呼ばれるのだろう。

「今日は、最悪な日だな・・・」

考え事をしながら学校を目指していると、走る足音が聞こえてくる。その足音は徐々に順平に近づいてくる。

「おっはよう！順！」

後ろからいきおいよく助走をつけられ、ひとりの少女に肩パンをされる。

肩パンにあまりにも力が入りすぎているせいか、順平はとても痛い。順平はひざをつくと、その少女を見上げる。

「なんだお前か・・・」

「ちょっと！なんだお前かはないでしょう！せっかくあいさつしているのに」

「悪い・・・おはよう」

この気の強い少女は俺の幼馴染である立川 春奈である。
黒髪にセミロングであり、目はパツチリしていて、顔のパーツは整っている。

いわゆる美少女である。

容姿から、学校の男子からは人気で、春奈を狙っている男子も少ない。

「順、なんか表情暗いけど、なんかあったの？」

「いや別に・・・」

「そう？ならいいけど、けど何あったら私にちゃんと相談してね」

「ありがとう、心配かけて悪いな」

まるで姉みたいに見えてくることもある。

春奈は順平にとっては好きという恋愛感情の対象でもない。

けど、幼馴染でもあり、ずっと一緒にいた仲でもあり、親友みたいなものである。

ひとまず学校を目指した。

学校に着くと校門をくぐる。

この学校は魔法コースと科学コースに分かれている高校である。
通常、中学校までは基礎学力と科学と魔法を勉強する。

そして、高校から科学コースと魔法コースに別れるのである。

しかし、中には小学校から高校までエスカレーター式の学園もあり、小学校からコースを選べる所もある。

学校に入ると、靴をはき変える。

順と春奈はひとまずここでお別れである。

この学校は科学コースと魔法コースとで校舎が別になっているからだ。

「じゃあ、私はこっちだから、ここで」

「ああ・・・」

「なんかあったら私に連絡すること！あと昼は来るんだよ！」

「ありがとう、でもそんな心配しなくても大丈夫だよ」

「もう、真面目に聞きなさいよ！ってちよつと！！」

順平と春奈が話している最中に、クラスの春奈の友達数人が春奈を連れて行ってしまった。

「あいつは本当、人気だな」

順平は独り言をつぶやいた。

順平も教室に向う。

第二章（後書き）

これから更新していこうと思います。

第三章（前書き）

一月中はバンバン、連載できるかもしれません。

第三章

時刻は12時。ちょうどお昼の時間である。

先生の眠くなる授業も終え、やっとゆつくりできる時間である。

順平は食堂に向うために、バックから財布を取り出そうとすると、ある手紙が床に落ちた。

「あ・・そういえば、まだ読んでなかったよな」

順平は手紙を拾うと、席に座り、”あいつ”から渡された手紙を開いた。

「まったく内容があきれる。今頃何の用だ・・」

順平は、食堂を目指し廊下を歩いている所である。

順平はあの手紙を読んだが、内容はどうかやら「話があるから、学校が終わったら来てほしい」という内容だった。もちろん順平は行くつもりはない。

「おゝい、順平！」

順平は自分を呼んでいる方に、後ろを向くと、ある少年が近づいて

きた。

「あ、どうしたんだ青髪？」

「いや、たいしたことないんだけどな、ちょっと声をかけたただけだ」

「そうか・・・」

声をかけてきたこの少年の名前は、青髪 勇太郎で、俺と同じ科学コースで、同じクラスメイトである。

見た目は、あきらかに真面目君と言ったような感じで、眼鏡をかけている。

勉強もできるし、科学に大変興味を持っていて、将来科学者を目指しているぐらいである。

実は眼鏡を取ると、結構イケメンな顔をしている。

「そつえば、声をかけたついでなんだが、今日放課後暇か？」

「ああ暇だけど」

「今日、ひさしぶりに二人でゲーセンでも行かないか」

「ああ別にいいけど、暇だし」

順平は”あいつ”との約束もあったが、もちろん行くつもりはないので、暇なことを伝えた。

「わかった、そんじゃあ後で！」

順平は時計を見ると、さっきより5分も話していたみたいだ。

「やべ！そろそろ行かなきゃ！」

順平は食堂に急いで走った。

その時、誰かとぶつかりそうになり、体を急ブレーキするが、肩が当たってしまった。

ぶつかってしまった相手は、どちらも男2人で、少し不良っぽい奴ら。

「あ、すいません」

肩がぶつかってしまった相手の少年は、順平を睨みつけたが、順平は急いでいたせいか、それに気づかなく、走って行ってしまった。

「あの野郎・・・おい！」

ぶつかったその男は、一緒に行動していた奴に声をかける。

「どうしました？」

「あいつなんだ？」

「あゝあいつつすよ、知らないっすか先輩？三崎順平とかいう科学コースのやつつすよ」

「科学コースの奴だと？科学コースの落ちこぼれが、俺らにあの態度とは」

「それに、ほらあいつ、あの学校内一の美人とも言われている立川春奈と幼馴染っばいっすよ」

「それ本当か？」

「はい、っていうか先輩知らなかったんすか？結構有名ですよ」

「うるせえ、知らなくて悪かったな」

「で、なんかするんすか？」

「まあな、魔法もろくに使えない科学コースの奴が、立川春奈と面識があるからって調子にのりやがって！」

「悪い！遅くなった！」

「遅い！」

順平は食堂に到着すると、春奈が待っている席まで行く。食堂を多くの生徒が利用する。そのせいか、食堂はいつもこんでいる。

「ちょっとちゃんと時間守りなさいよ」

「悪い悪い」

順平は席に着くと、おぼんを持った少年が順平達のいる席に近づいてきた。

「よう！やっと来たな！」

その少年は、おぼんにのったカレーライスを机に並べる。

「お前の分も用意したからな」

「ああサンキュー雄一」

この少年の名前は草加雄一。

俺の中学校からの親友である。

いかにも体育系といったような顔立ちであり、髪は短い。

雄一の家は、魔法の伝統的な家で、雄一の両親は、俺と仲がいいこ

とはあまりいいとは思っていないらしい。

けどこいつは、今こうして俺と親友としていてくれている。

親の考えをおしきってでも。

その後、三人で食事をしながら、昼休みが終わるまで世間話は続いた。

「いいか今日の放課後を狙うぞ！」

「うーす」「」

一人の男の命令から三人ぐらいの男が返事をする。

第三章（後書き）

内容からして学園物っぽいかもしれませんが、一応アクションとフアンタジー系です。

後半の方に、アクションシーンを出していきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3081o/>

S.M.W

2011年1月7日12時21分発行